

親近感抱くギフトの光景

ある日のこと。いつもはクルマが止められているパーキングに、小屋がある。1台分のスペースに収まる白い家には、三角屋根に窓と扉がついている。こんなところになぜ。不思議に思つて見ているといきなり2本の脚が生えて、ゆっくり移動を始めるではないか。

一瞬、誰もが自分の感覚を疑うような、この光景を現実のものにしたアーティスト、それが著者である。タイトルが示すように、この「家」をすみかにしながら東北から九州まで、1年かけて「移住を生活する」日々の記録だが、どのページにも実際に歩いた者でなければ見えない列島の細部が刻まれ、いちど読み始めると止まらなくなる。

春夏秋冬の順に構成される。たとえば10月のある日。移動生活をするには、その日の寝場所の確保が大問題になるのだが、日が暮れるのが早くなると敷地探しも大変である。折しも台風が近づき、気温も下がつてくるが、なかなか許可がもらえない。風も強く

なり万事休す。それでも家だけ置かせてくれる親切なドラッグストアが見つかりセーフ。ほつとした。読みながら、まるで自分がその場にいるかのような、不思議な親近感を覚える。それは著者が出会った人たちの言葉を丁寧に的確に、そして絶妙な距離感をもつて書き留めているからだろう。ネットと現実が一体となつた時代の、新しい民族誌的観察でもあるが、それを支えるのは、家の「絵」を描き続けている人の確かなまなざしである。

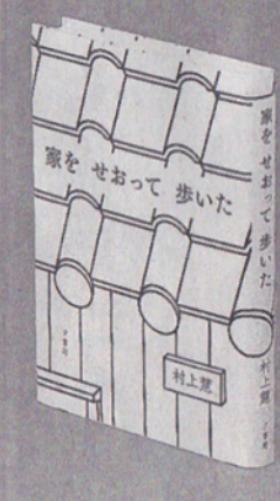
敷地を貸してもらうだけでなく、いろいろな人に差し入れをもらつたり、地元のお祭りに呼ばれてみこしを担いだり。それらは偶然の出会いを通して行き交う、社会的なギフトの光景である。偶然から日記が書籍化され、素晴らしい装丁の本書が、まさに新出版社の第1号となつたことは、その証しなのだと思う。

ギフトの交換を通じて社会的な次元をもつて至つた「家」には、何かの手応えがあり、わたしたちはそれを信頼できる。きっと希望にちがいない。(港千尋・写真家)



家をせおって歩いた

村上 慧著



夕書房・2160円

／むらかみ・さとし 1988年
東京都生まれ。美術家。武蔵野美術大学卒「瀬戸内国際芸術祭」や「六本木アートナイト2013」など